

「コスモス」の再構築に向けて

——ポリフォニックな生き方を考える——

丸山敏秋

緒言

ツトム・ヤマシタ氏は、世界で唯一、サヌカイトという太古の自然石を楽器にして演奏する高名なミュージシャンである。『The Kyoto Manifesto for Global Economics——The Platform of Community, Humanity, and Spirituality』(Springer、二〇一八)に掲載されたヤマシタ氏の論文の末尾には、「石から教えられた Polyphony の本質」について次のようにある(原文は英文)。

Polyphony とは地球上で存在するあらゆる物、仏教では山川草木悉皆成仏、そして観世音とも呼び、又科学的には循環を繰り返す、生態系の本質、つまり自然界の活動にて生まれる多声音の世界観を示す意味の言葉です。

21Cの今、我々人間社会は、デジタル技術主体でもって生活の殆どを営んでいます。音楽の世界でもデジ

タル音源を基にした音を聞いています。

つまり疑似化された音、バーチャル音を聞きながら生活をしているのです。しかし大切なことは、Polyphony が意味する自然の循環、瞬間の即興からなる自然界の多声（多様性の共存）であります。

今を生きる我々人間が出す人工音・バーチャル化したデジタル音が地球上を覆った時、自然界の大半が消滅するかも知れない事を認識せねばなりません。

今一度、人間にとって「生きる」とは、その意味を考えることが最も重要な課題であります。

その為に私は Polyphony——アナログの持つ世界観の意味、その再認識が必要である事を提言いたします。

二〇一四年からヤマシタ氏と繰り返し会って親しく接してきた筆者は、この提言を重く受けとめている。

筆者は八十年近く事業を展開してきた民間の社会教育団体の理事長を継承し、東アジアの倫理思想を主たる研究領域としている。混迷の度が増し、不気味なニヒリズムが蔓延し、近未来のビジョンすら描けない世界や自国の閉塞状況を打破するにはどうしたらいいのか？ それを強い問題意識として仕事をしてきた者にとって、Polyphony（ポリフォニー）の一語は考えを進める上での大きな手がかりになった。

この小稿では、筆者が体験したある特異な出来事を紹介した上で、現代の危機的な状況を確認し、人類に求められているコスモスの再構築について、Polyphony をキーワードとして考察を進める。